

小島信夫『抱擁家族』の本文形成——「四十代」・「眼」・「返照」

松本和也

I 幻の『いつかまた笑顔を』

「抱擁家族」(『群像』昭40・7↓講談社、昭40)は小島信夫の代表作にして戦後文学の金字塔でもあり、頻りに批評・研究の俎上にもあげられてきた(1)。ただし、初出は三七五枚一括掲載であるにせよ、単行本版『抱擁家族』の本文(形成)までにはこみいった経緯がある。

まず、『抱擁家族』の原型となった作品として、『いつかまた笑顔を』(昭37・2刊行予定)がある。版元の雑誌には、次のような広告文(『新潮』昭37・2)までもが出ていた。

小島信夫『いつかまた笑顔を』／蝕まれた夫婦生活を描く長編野心作。／ある時からお互に笑顔を忘れてしまった歪んだ夫婦生活！だが、一緒に暮してゆく以上、何としても笑顔を回復させねばならない……泥沼の中で足掻きながら、妻の微笑を求める中年の夫の喜劇的な努力を通して、平衡感覚を失った現代人の病根を抉る問題作。

『新潮』の担当編集者・谷田昌平は、昭和三十六年当時を次のように振り返っている。

夏のころ原稿は書き上がり、十月初旬に小島氏は駿河台

の駿台荘でグラ直しを始めた。この段階で表現の分かりにくい所、構成のゴタゴタしている所などについて私は意見を述べ、氏は私といろいろ話し合った上でグラ直しを進めたが、大幅な補訂箇所が続出して膠着状態になり、結局出版できないで終わった(2)。

さらに、その後の小島信夫と本文のゆくえについても、谷田は次のように言及している。

その後間もなく夫人が乳癌の手術をし、翌年には国分寺に新築した家に移り、その翌年には夫人が亡くなるというようなことが小島家には次つぎに起きた。そういう状況をも素材に取り入れて、四年後の昭和四十年に改めて『群像』に書いた作品が『抱擁家族』(講談社刊)である(3)。

谷田の言に従えば、『いつかまた笑顔を』をベースにして、その後小島家に起きた出来事をモチーフとして取り入れた上で成ったのが『抱擁家族』だということになる。してみれば、夫人の手術・逝去やその間の新築住居への転居といった『抱擁家族』にみられる主要プロットは、『いつかまた笑顔を』段階では盛り込まれていなかったということになる。

時期はさらに遡るが、小島信夫本人も、自身の全集解題で次

のように論及している。

「いつかまた笑顔を」という小説は、谷田さんの督促や好意や努力によって格拉にまでなった。ところが本人もそうだが、新潮社側もこのままでは困るといううちに、活字を組んだままにしておくわけに行かず、くずしてしまった。私は格拉刷だけでもって、この作品を書き直すか忘れるか、迷っていた。出来たばかりのクラブを利用して貰い、家を建てるための金を前借りしていたし、家を建てられつつあったので必死になって書いたのだが、結果は右の如くになった。その後家は建ち、家に不幸が起りその後ばんやりと暮すうちに新しく小説を書く気になった^(四)。

引用につづいて《その間に、「四十代」（昭和三十六年）「街」（昭和三十九年）「返照」（昭和三十九年）などの短編を書いた》と論及された短編は、本稿でも検討していく。その上で注目したいのは、《既に「群像」に長編をのせることになっていた》という小島信夫が、《いつもより以上に渾沌とした状態》にあつて、森敦との対話や夏目漱石『明暗』、志賀直哉『暗夜行路』を手がかりに、『文体』を練っていたという次の件である。

一口でいうと、「明暗」は津田のエゴイズムというものの分析がしてあるがために、リアリティがそがれるように思われ、一種のタイクツさがある。いいかえると作者との距離のおき方からして、絶対的なものが厳然とどこかにあるかの気配が濃厚すぎる。そこに一種のノンキさがあるかに見える。絶対というものがあるとすれば、どこか高みにあるのではなくて、愚劣さの裏側に、あるとすればあるもので、しかとあるのではなくて、あると思えたり、ないと思

えたり、忘れているとあつたり、ない、と思ひこんでいることがあることだつたりするようなものでなければならぬ、という気持があつた。〔略〕この考えは、「抱擁家族」の文体の中に端的にあらわれているはずで、何度も書き直し、書き直したのは、文体のためだったかもしれない^(五)。

ここで示された、『抱擁家族』執筆期における小島信夫一流の行きつ戻りつする思考^{II}『文体』に、作品生成の鍵をみることもあながち不可能ではないだろう。しかも、『いつかまた笑顔を』前後には、『抱擁家族』と部分的な重なりをもつ短編が発表されている。そうであれば、『いつかまた笑顔を』からの変更点を検討することは不可能でも、前後する時期の短編――「四十代」、「眼」、「返照」、そして初出版『抱擁家族』から、単行本版『抱擁家族』へと本文が形成されていく過程ならば、具体的な検討ができるはずなのだ。

II 「抱擁家族」のベースとなつた短編群

「四十代」(『文学界』昭36・11)は、初出誌目次に《引越しをめぐつておこる中年夫婦の波乱／妻の執拗な愚痴に悩まされる夫の抵抗!》と紹介された九〇枚の作品で、「第一の控」・「第二の控」・「第三の控」・「第四の控」という「私」による四つの手記から構成されている。「私」は、大学教員兼小説家で、容易に小島信夫を想起させる設定となっており、増築・新築・転居といったモチーフも、前後する時期の小島信夫の小説やエッセイと重なっており、自身の身辺に題材をとったことが示唆されてもいる。「私」の同僚や工事関係者、同世代のX氏なども

登場するが、彼らとの会話の中で「私」が考えているのは妻との関係である。具体的には、夫婦関係のいきまりの打開策としての増築・新築をプロットの柱にすえ、しかしそのスムーズな展開を妨げる費用の問題や工事の遅延、さらには夫婦間のストレスが、「私」の苦渋とともに綴られていくのが「四十代」なのである。

ここで、「四十代」の同時代評を確認しておこう。沢野久雄「文芸時評（下）文学の新しい企て」（『東京新聞』昭36・10・28夕）では《ほとんど夫と妻の対談だけで出来ていて、筋を紹介することは出来ない》と評され、村松剛「純」文学論（『文芸時評』）（『文学界』昭36・12）でも《家の新築という事件をきっかけに、夫婦の間に展開する心理的な葛藤をえがいたもの》と把握されている。「四十代」を《小島としては失敗作》だと断じる村松は、《新築、夫婦関係という主題》の共通点から「馬」に比して《噴き上る力が感じられない》として、『私小説的な「事実」のもつ重み』に頼った点を批判している。あるいは、少し後になるが、磯田光一が「現代小説の転位——表現構造と文体の問題——」（『文学界』昭42・12）で「四十代」に論及して、次のようにその主題を読み解いている。

小島信夫氏の『四十代』の主人公は、こじれた夫婦仲を建て直すために巨大な家の建造を志す。このばあい、家屋の建造と夫婦仲とはまったく別問題のように見えるかもしれない。しかし家の建造という目標を設定し、それに向って進むことによって、彼はそれがメタフィジカルな意味をもつかもしれぬことをひそかに期待していたのではないか。

ここにおいて家を建てるという行為は、自己救済への賭け

という意味あいさえもちはじめる。

以上から、「四十代」が、本来別であるはずの家と夫婦関係とが相關関係をもった小説、かつ（磯田の『自己救済』という読みも含めて）私小説として受容されたことが確認できる。さらに、結末で、妻が乳房の違和感（ガンの可能性も示唆される）により三週間入院するという展開も含めて、「四十代」は「抱擁家族」のベースの一つだと考えられる。表現レベルに至るまで重なりをみせる両作品は、しかし人物や話柄の配置を異にすることによって、類似したモチーフが別様に描かれ、そのことで二作品の特質は浮き彫りにされてもいる。

近似した設定の中で、一番大きな差異は、「四十代」における一人称「私」の語りから、「抱擁家族」における俊介に内的焦点化した三人称の語りへの変更である。それに伴い、「四十代」における「私」と「妻」は、「抱擁家族」の俊介と時子へと呼称も変化する。

【引用①「四十代」二四頁】

その二人がプールで泳いでたわむれている。それからそこで芝生の上で抱擁しながらたおれる。しばらく横になっている。私はゼイ肉の一つ一つを自分のゼイ肉の一つ一つにじかに感じているのだが、私の空想の中では妻も私もゼイ肉をおとしてずっと若々しい。「略」たしかに二十代の時よりも、私はバラ色にあこがれている。そこで何の睦言をしよう。二十代では彼女は一晚中抱きつづけてくれたといった。それから、おしゃべりをするようになった。それから何もうわなくなつた。騒々しいのはごめんだが、静かなおしゃべりは、私は大歓迎だ。

【引用②初出版「抱擁家族」五四頁】

夫婦がプールで泳いでたわむれている。それから芝生の上で抱擁しながら倒れる。しばらく横になつてゐる。彼女の贅肉の一つ一つを自分の贅肉の一つ一つにじかに感じているのだが、空想の中では、俊介も妻も贅肉をおとしてずつと若々しい。「略」二十代の時の何倍も自分はバラ色にあがれている。何か睦言をしよう。騒々しいのはごめんだ。静かなおしやべりなら大歓迎だ。

いずれも、夫が妻との睦まじい関係を「空想」する場面である。出だしを除いた両者の大きな差異としては、二十代以降、私に対する妻の態度の変化が示された引用①の傍線部が、引用②では削除されている。「四十代」では、「私」の一人称語りのため「私」が体験してきたことを自在に語り得たのに対し、「抱擁家族」では、俊介の現在進行形で展開される「空想」は語り得ているものの、俊介と時子の関係の変化までは論及し得ていない。

してみれば、「抱擁家族」の語りは、俊介に内的焦点化しているとはいへ、一人称で語る「私」に比べれば、不可視の情報については制限があり、それは後述の話し法にも関わる。

別の例もみてみよう。場面は少し遡るが、二作品とも、新築に際してセントラル・ヒーティングの導入が、異なる仕方で話題になる。「四十代」では、次のように書かれている。

【引用③「四十代」一八頁】

私がかねがねアメリカのようにセントラル・ヒーティングという式のものにしたら、どんなものか、と空想していた。私の素人考えでは比較的安いものだ、というふうに思

われた。地下室か、あるいはどこかに釜があつて、その釜に油かくずものを焚いて管を通して空気を各部屋に送る。寝むときは毛布ぐらゐで寝ることができると。

ほぼ同様の内容が、「抱擁家族」では、直接話し法を用いて次のように書かれている。

【引用④初出版「抱擁家族」五二〜五三頁】

しかしけつきよく時子は家のことを考えていた。

「こんど作るのなら、どうしたつてアメリカ式のセントラル・ヒーティングというやつにしくつちや」と時子は呟やいた。そういうことを考えていたのだろうか。

「あれは、地下室で重油をたいて、ダクトで各部屋に空気を送るしかけになつてゐるんだな。夜やすむときは、毛布一枚でねられる」

こうして彼が語るアメリカの知識には時子はわざとのように耳を傾けなかつた。

「四十代」では「私」が「空想」したアイディアだったセントラル・ヒーティングが、「抱擁家族」になると、俊介／時子へと分割された上で、双方とも直接話し法によつて示される。こうした操作によつて、語りは俊介の内面に焦点化せずとも、右のモチーフを提示することが可能となつており、単にセリフを時子と俊介へと分割しただけでなく、語り方の変化に対応した修正にもみえる。また、両作を並べることで、「私」／俊介と妻／時子が考えていたことが、似たようなものであつたことも推測可能となつてゐる。その上で、前者では「私」の独りよがりだった「バラ色の夢」が、後者では、会話を通じて明示され

た齟齬によって、夫婦のディスコミュニケーションを意味するものへと変じている。

また、妻／時子の、乳ガンが疑われる乳房の違和にしても、二作品で書き方が異なる。

【引用⑤「四十代」三二頁】

私が妻のことを考えているのは、今までのようなものではない。妻の乳房が重くずっしりとしていると思ったのは、実は何かしこりのようなものが出来ているらしいことが分ってきたからだ。「略」まだ一月前に彼女は、そのようにして坐りながら、乳房を私に見せて誇らしげに何かい、それから私たちは抱擁したことが二、三度あったからだ。

このように「四十代」では、妻が乳房を気にしているのを見かけもし、抱擁することによって、つまりは夫婦関係を通じて、妻だけでなく「私」もその「しこり」に気づき、心配している（「四十代」では、乳ガンの疑いが書かれるところまでで作品が終わっている）。

それに対して、「抱擁家族」では、鈍感な俊介に、時子が教える論ず書き方になっている。

【引用⑥初出版「抱擁家族」五四～五五頁】

俊介が、時子を抱いて、その腕に唇をあてていると、彼女は眼をあげて、彼をおしのけた。

「ちよつと、そこるところ、そつとさわつてみてよ」

【略】

「いつごろから、これがあるのだね」

「よく分らないのよ。ノリ子が学校できいてきて、お母さん大丈夫？ というもんだから、しらべたら、あつたのよ。」

もつと小さなもので、小豆粒^{あずき}ぐらいなもので、痛くないと書いてあるんだけど」

同じく、夫婦は抱擁を交わしているのだけれど、俊介が積極的に心配する身振りを見せることはなく、「私がガンになるなんて、あり得ないわよ。」という時子の言を肯っている。つまり、「四十代」の夫婦が睦まじい関係として書かれたのに比して、「抱擁家族」になると、乳ガンに気づけなかった俊介の造形を通じて、疎遠な夫婦像が強調されていく。

しかも、引用⑤では「私」の一人称語りによって、事情が事細かに語られていく一方、引用⑥では直接話法が多用され、その前後にも語りの言説が配されることが少なく、行き違いがちな俊介と時子のディスコミュニケーションが、前面に押し出されていくことになる。

「眼」（『新潮』昭37・2）は、初出誌で一〇頁の作品で、「1」～「4」の四章で構成され、ほぼ時系列に沿った一人称「私」による語りから成る。やはり、小島信夫を彷彿とさせる物書きの「私」と、（病名は明示されないが）病気で入院・手術をする妻との関係がクローズアップされており、それを示すパロメーターとして新築中の家——ことにフロに関する話題が、終始二人の間で取り沙汰されていく。手術後の入院生活を描く「2」以降は、「抱擁家族」第二章なかほどのシックエンスと、プロットから表現レベルに至るまできわめて近似しており、「眼」もまた、直接的に「抱擁家族」のベースとなった短編といえる。

まずは、「眼」の同時代評を確認しておこう。《「四十代」以来作者が手がけている自宅新築にまつわる話で、今度は風呂の話し》だと「眼」を紹介する野島秀勝は、「『力作』は大田の

「恋責め」 文芸時評」『図書新聞』昭37・1・27)で二作品の連続性を指摘した上で、《初期にみられる彼本来の戲画的世に戻ってきた》と判じ、《これはいいこと》だと評している。

また、河上徹太郎は「文芸時評(下)」「恋責め」「帰りみち」の共通点」『読売新聞』昭37・1・31夕)で、《細君を病院に送り込んでの話》と要約した上で、《「眼」の亭主は、細君の入院中羽根をのばしているようでいて、結局同じ目(妻の尻にしかられている／引用者注)にあっている》と、同時期発表の「弱い結婚」との相似性を指摘している。総じて、「眼」はとりたてて話題とはならなかったものの、前後する時期の夫婦関係をモチーフにした作品の一つとして、「抱擁家族」第二章のベースとなっていくのだ。

この二作品でも、大きな差異として、「四十代」における一人称「私」による語りから、「抱擁家族」における俊介に内的焦点化した三人称の語りへの変更に指摘できる。それに伴って、「眼」の「私」と「妻」は、「抱擁家族」の俊介と時子へと呼称も変化している。

入院した妻／時子を見舞う「私」／俊介が、腕をさするよう頼まれた件をみてみよう。

【引用⑦「眼」四八頁】

私は立ちあがつて腕をとる。いつまでたつても彼女は、もういいとはいわない。もう一時間になる。私は眼をつぶり、時々あけ、また眼をつぶり、チラとこちらを向き、そしてまた眼をつぶる彼女を横眼で眺めている。そうして私も、へらへらと笑う。

【引用⑧初出版「抱擁家族」五八頁】

俊介は立ちあがつて腕をとる。いつまでたつても、もういいとはいわない。もう一時間になる。俊介は眼をつぶり、時々あけ、また眼をつぶり、そうしてチラとこちらを向き、また眼をつぶる彼女を横眼で眺めている。そうして二人は、気のぬけたように、笑った。

人物を指示する呼称の変化(「私ども／二人」と併せて注目しておきたいのは、引用⑦「こちら」の一語で、これによって「抱擁家族」の語りが、俊介に寄り添った位置どりをしていることが、「私」の一人称による「眼」と同じ表現であることから、確認できる。

もう一箇所、病室を抜けた「私」／俊介が、フロを見にいった件を比べておく。

【引用⑨「眼」五一頁】

「只今はどんな浴槽をお使いで」

「今? 今はフロはない。仮住居だからね。これはしかしひとり入るにしても、ほんとに小さいね」

「お二人お入りになるのであればありませんから大丈夫ですよ」

「何も二人で入るつもりじゃない」

せつかくとりつけたフロがぐあいが悪いと、また二人が困りはてるだろう。私はそのことを気にやんでいるのだ。

もちろんへまはしたくない。ところが、へまを見つけたことにかけては、私たちは上手になつてゐる。

「おフロはお好きで?」

「とくに好きということはない」

「奥さまはお好きで?」

「フロが好きではないのだ。フロが好きだから我々はフロへ入るのではないのだ」

フロは一つの意地なのだ。私はそう呟きながらそこを出た。

【引用⑩初版「抱擁家族」五九頁】

「只今はどんな浴槽をお使いで？」

「今？ 今はフロはない。仮住居だからね。これはしかし、ひとりで入るにしてもほんとに小さいね」

「お二人でお入りになるではありませんから、大丈夫ですよ」

「何も二人で入るつもりじゃないさ。とりつけて、ぐあいがあるということになると困るんだよ。いいかね。それとはかく、とても困るんだ」

「分つています」

「分つてなんかないだよ」

俊介はかみつくようにいった。急に腹が立つてきた。

「おフロはお好きで？」

「とくに好きということはないさ」

「奥さまはお好きで？」

「家内？ フロが好きではないのだ。フロが好きだから我我はフロへ入るのではないのだ」

右の引用⑨・⑩について、「眼」においては、会話の合間に「私」の心境が説明的に挟まれていくのに対し、「抱擁家族」では直接話法のみで進行する場面となっている。従って、明示的に書かれた情報量は引用⑨の方が多いのだが、引用⑩においては、非論理的なかたちで俊介の予想する困惑が書かれており、

つまりは書き方の変化が生じているのだ。

「返照」『群像』昭39・5）は、初出誌で一七頁の作品で、一行空きによつて六つのパートに分節されている。時間軸は頻繁に前後するものの、基本的には妻に先立たれた後の一連の出来事をモチーフとした、「私」の一人称語りによる作品である。冒頭から、妻の死が提示され、残された夫である「私」が、妻の終末期を思い返しながらも、再婚に向けて自ら奔走し、同居することになったHや、息子・娘との関係を失調していく悲喜劇である。表現レベルにおいては少なからず懸隔がみられるものの、夫婦にくわえ、息子と娘、さらに同居することになるH・山岸といった人物関係、妻の死後の混乱といったプロットを考えれば、「返照」が「抱擁家族」第四章のベースとなったとみて間違いない。

発表当時、「返照」がもつた強烈なインパクトについては、三浦清宏に次の論及がある。

これ（「返照」／引用者注）が雑誌に出たときにさつそく読んで、ばくは、小島さんが身の回りのことをあまりに赤裸々に書いているので、おや、と思った。「略」これは小島さんが奥さんを亡くして間もなくの混乱した家庭を描いた小品だが、代表作の一つである「抱擁家族」に繋がる、いわば「抱擁家族」のスケッチとでもいうべき、それ以後の小島さんの作風を示す転換点となった重要な作品だと思ふ（20）。

「返照」に対する同様の発言は、小島信夫・遠藤周作・安岡章太郎・吉行淳之介・庄野潤三「座談会 文学と資質」『文芸』昭40・7）における、次の一節にもみとれる。

庄野 「略」また小島が奥さんをなくしてから、前の奥さんのことを書いた、非常に人間くさい小説があるわけですね。「群像」に書いたが……

小島 「返照」……

庄野 あれなんかほんとうにうらやましい。人間くさいものを見つめた世界が出てきて、それで渾然たる作品といふところまでは行っていないにしても、いままで誰も書いてないものを書いてる作品ということで敬意を表しているのです。

ただし、初出時の同時代評では必ずしも好評というわけではなかった。「返照」を《妻を死なせた中年男の述懐みたいな作品》と捉えた「今月の小説（下）ベスト3」「毎日新聞」昭39・4・28夕の平野謙は、《実際に妻をなくした中年男の心境には、あきらめきれぬ興味と関心をよせざるをえない》としながらも、《この作品には、そういう私のような迷妄をドカンとどやしつけてくれる力に乏しく、私には残念だった》と否定的に評している。河上徹太郎も「文芸時評（下）楽屋裏のふんい気を描いて」（『読売新聞』昭39・4・28夕）で、「返照」を《わからないといえわからない小説》とみなし、《妻を失った男のモヤモヤしたものを気分的に反映しようとした試み》という理解にとどまっている。やはり、《妻に死なれてホッとした夫の気持を描いたもの》と「返照」を捉える「小説は言葉かー」（『文芸時評』）「『文学界』昭39・6」の秋山駿は、《氏はこの心情を現実のなかで説明するほど素朴ではない》として、《現実の翻訳であるところの観念の明晰さをもたない》・《不明瞭な言葉だけの存在になってしまふ》と、その観念性を批判している。

してみれば、「返照」は同時代において曖昧な印象を残したようなのだが、にもかかわらず、同時に、小島信夫の実体験に即した赤裸々な私小説としても受容されていたのだ。

この二作品においても、「返照」における一人称「私」による語りから、「抱擁家族」における俊介に内的焦点化した三人称の語りへの変更がみられる。それに伴い、「返照」の「私」と「妻」は、「抱擁家族」では俊介と時子へと変化し、息子や娘も登場している。

「返照」では、妻の死後、息子を中心とした家族の動揺は、家に住みこむことになった「私」の若い友人Hによって、一連の出来事を要約した次の直接話法によって語られる。

【引用⑩「返照」一三〇頁】

「息子さんは、僕が、あなたの若い友人である僕がせつかくあなたの所へきて淋しさをまぎらかしているのに、とつぜん家を出て外で暮すといひだしたではありませんか。そこで今度、あなたが家を出ることはまかりならん、といったとき、それなら、友人を連れてきていつしよに住むといひだしたじやありませんか。それから二、三日したら息子さんはベランダの下の地下を掘って部屋にするといつて、友人と穴を掘りだしたでしょう。それから、無計画に始めたものだから家が傾きかけて職人が泊りがけできて恰好をつけたあと、二週間たつたためのに、あなたが夜中に帰つてきて、息子さんと喧嘩を始めて、息子さんに出て行け、といったでしょ。『略』僕にいわせれば、みんな唐突で、あなたと息子さんは、喧嘩するにしても、とつぜん、おつはじめ、思いもかけぬ結論に辿りついて、そうなたも

のは仕方がない、と思つているところが、似ているといつていい。さつぱり分らない」

右の引用⑩で言及された出来事は、「抱擁家族」第四章においても展開されていくが、そこでは複数の人物による言動と語りによって、より再現性の高いかたちで書かれていく。

【引用⑫初出版「抱擁家族」一一八―一九頁】

「兄ちゃん、よしなさいよ。兄ちゃんは自分のいいいことがあんでしょ。そのいいたいことが、お父さんに反対されることが分つているもんだから、いらいらしてるのよ。兄ちゃんは、外へ出たいといつてるのよ」

友達と三人でアパートを一室かりて自炊しようというのだつた。ポケットから費用の明細書を取りだした。アパート代は九千円とボールペンで書いてあつた。

「山岸さんが家へきてくれたのは、兄ちゃんのためもあるのよ。それにまだこうして、白木の箱にお母さんの骨壺があるのに」

良一はニタニタ笑いだした。その笑いかたは、ある頃の俊介の笑い方に似ている。それを見ていると、俊介は自分が時子になつたような気がした。

「お母さんなら、許さんな」

といつた。

これ以降も、俊介、良一、ノリ子という三輪家のメンバーと山岸による直接話法と、時折俊介の内面に焦点化した語りによつて場面は展開され、それに伴い情報量も増えている。

【引用⑬初出版「抱擁家族」一三四頁】

「三輪さん、良一くんが何を考えているかは、僕にはよく

分らないけど、あなたと良一くんは、よく似ていますね」と山岸は感嘆したようにいつた。「あなたは、前にこの家を作る気がなくて作つたようなことをいわれたけど、じつさいに作つたのは、三輪さんでしょう。こんどもあの部屋を作つたのは、何のかんのいいながら、あなたですから。僕には、もうすっかりナゾが解けたな、この三輪家というもの」

引用⑩の結末部は引用⑬へと修正され、他者である山岸からみた俊介を中心とした三輪家の不可思議さが、家・部屋といった要素とも関わるエッセンスとして提示されていく。

総じて、「四十代」・「眼」・「返照」は、表現レベルまで含めてごく近似した、文字通り「抱擁家族」の部分的なベースとなつた短編群といえる。また、時系列からいえば、家の新築をめぐる夫婦関係の変化を描いていたであろう『いつかまた笑顔を』にはみられなかったはずの、妻の病氣・死・死後の展開といったモチーフが、右の短編によつてはじめて小説化され、それらが総合されることで「抱擁家族」本文は形成されていつた。

その際、一人称「私」による夫婦関係をめぐる語りから、三人称で登場人物も増え、直接話法を多用した、俊介に内的焦点化した語りへと変更された。そのことにより、類似した場面を書く際にも、ていねいかつ説明的な短編群に比して、「抱擁家族」では多くの人物の立場（利害）からの言動が並置的に示され、明示的な説明は減少しながらも、個々人の性格、心境、その場の雰囲気、《絶対》のない流動的な関係性の中、独自の《文体》で書かれていくことになるのだ。

III 初出版「抱擁家族」から単行本版『抱擁家族』へ

「抱擁家族」が発表された際、山本健吉・福永武彦・本多秋五「二一九回創作合評」(『群像』昭40・8)において、本多は「この主人公は作者にかなり近い経歴、職業、地位をもった人物であつて、小島信夫がずつと書いてきた小説の集大成みたいなものになつている」^⑤と指摘している。ただし、初出版「抱擁家族」は単行本化に際して少なからず改稿される。

その検証に先立ち、「四十代」・「眼」・「返照」をベースとしつつも、いかにして初出「抱擁家族」が成ったかを確認しておきたい。既出短編群が、初出版「抱擁家族」第二章・第四章のベースだったことにも明らかのように、第一章までには新要素が多い。その最たるものは、時子(主人公の妻)の不倫相手となる米兵ジョージと、家族関係を掻き回す家政婦のみちよ、という登場人物の追加である。この二者の登場によつて、三輪家・新築の住居に、他者が入りこみ、プロットとしては時子がアメリカ人であるジョージとこの家で姦通を犯し、そのことをみちよが俊介より先に知る。こうした展開によつて、作品で始終問題化されていく夫婦関係、家屋、時子のガンという三つ巴の相關関係に、姦通、アメリカ、夫(俊介)の立場といった要素が強い影響を持統的に及ぼし、「抱擁家族」には重層的な意味の網目がはりめぐらされていくことになる。また、俊介・時子夫婦の子供である長男の良一、長女のノリ子、時子の死後に同居する山岸といった登場人物も加わり、特に後半、時子死後の三輪家において、重要な役割を果たしていくべく、人物像に肉づけが施されていく。

さて、初出「抱擁家族」から単行本版『抱擁家族』への本文異同については、用字や表記等、細かい修正をはじめ、単語やフレーズ、文章単位での加筆・削除(三〇行にも及ぶ削除例もある)、さらには以下に検証していく、内容に関わる重要な加筆修正もみられる。

【引用⑭初出版「抱擁家族」一六頁】

三輪俊介はいつものように思つた。家政婦のみちよが来るようになってからこの家は汚れはじめた、と。そして最近とはとくに汚れている、と。

【引用⑮単行本版『抱擁家族』三頁】

三輪俊介はいつものように思つた。家政婦のみちよが来るようになってからこの家は汚れている、と。

引用⑭と⑮は、情報としては大差はないが、右は作品の冒頭でもあり、単行本版では、みちよと家と「汚れ」(妻の姦通と家族の不和)の關係がより緊密に結びつけられている。

【引用⑯単行本版『抱擁家族』一九七頁】

「清水さんは助かったというが、僕なんか使われちゃった」と山岸がいった。

誰か他人がいなければ、他人がいなければ、と俊介は呟やいた。

右は、時子の死後、呼び戻されて三輪家で采配をふるうみちよを、山岸が褒める場面である。引用⑯に付した傍線箇所は初出時にはみられず、単行本に際しての加筆である。もう一箇所、時子死後の家族の動揺を書いた、良一の台詞以降の大幅加筆もみておこう。

【引用⑰単行本版『抱擁家族』二二二頁】

「ノリ子はどうなるのだ。男のような口をきいて、せのびして、あれでいいのか。そして、あいつも夜は眠れないし、朝はおきられない。起きられるのは、お父さんと、山岸さんと、木崎だけだ。木崎は、僕が眠っているといい気になつて優等生気取りで起きる。そして新聞を読んだり、僕を、三輪、起しろ、もう山岸さんが一度起しにきたぞお、というんだ。あいつは、山岸さんにも、点数をとっている。ジョージが泊つていたときは、お母さんがいたからいいんだ」

「どうして、ジョージと較べるんだ」

と俊介はうるたえながら囁くようにいった。

「だって、そうじゃないか」

「なぜだ」

「そんなこと、おれは知らないよ。ジョージだって、もともお父さんが泊らせた気持があつたんだ。アメリカへ行つていたんだろう」

「あれはちがう」

「あれはちがう？」

「だって反対しなかったじゃないか。お母さんはお父さんの喜びそうなことをしたんだ」

引用⑩の傍線部は初出時にはみられず、この大幅加筆により、良一の口からジョージの名前が出て、俊介・時子も言及されることで、改めて姦通を想起させる場面となっている。

最後に、やはり大幅な加筆修正がなされた結末部も検証しておこう。

【引用⑩初出版「抱擁家族」一四五頁】

俊介はみちよを押しつけるようにして、良一の部屋へ入

つて行つた。あの時に似ている。三年前のあの日、みちよが時子のことを告口したときと。時子、お前は、おかしいふう^⑪にこの家に生きている、と俊介は心の中でいつた。

【引用⑩単行本版「抱擁家族」二五六頁】

俊介はみちよを押しつけるようにして、良一の部屋へ入つて行つた。

それから窓からほとんど出て見たこともない暗い広いベランダを眺めた。俊介の胸の動悸が高まつてきた。階下へおりて行き、靴をはいて外へ出ようとして、大きなガラス戸にぶつかった。客がドアをまちがえたことはあつたが、彼がまちがえたのは、はじめてだった。

「こんどはノリ子が……」

ノリ子が出て行くことはあるまいが、その代り……。俊介は外へ出ると、坂を走つておりた。彼の家の犬が吠えだした。山岸を追出すのだ。いや、その前にみちよを……

引用⑩では時子と家との関連が手短かに示されて終わっていたのが、引用⑪では時子のことには触れられていない。逆にクローズアップされるのは、自宅にぶつかる俊介とノリ子という家族の危機、そして、ことの発端となつたみちよの存在である。いづれにしても、単行本版では、家屋と三輪家の関係は示されるものの、「……」の多用も相まって、複数の人物による多角的な視点が併置されることで、オープンエンドへと変更されているのだ。

総じて、単行本版『抱擁家族』とは一挙に成つたものではなく、『いつかまた笑顔を』、『四十代』、『眼』、『返照』、初出版「抱擁家族」をへて、その間たえず語り方の変更や加筆修正——《文

体』の練り上げによって、動き、つづける本文が、仮止めされたものなのだ。それゆえ、『抱擁家族』以後の小島信夫は、『別れる理由』（昭57）をはじめ、『静温な日々』（昭62）、『うるわしき日々』（平9）といった続編を書き継いでいくことになるのだ。

〔注〕

（一）立尾真士「研究動向 小島信夫」『昭和文学研究』平23・9
他参照。

（二）谷田昌平「小島信夫——未完に終わった「いつかまた笑顔を」」『回想 戦後の文学』筑摩書房、昭63

（三）注（二）に同じ

（四）小島信夫「解説をかねた『あとがき』」（『小島信夫全集3』講談社、昭46）

（五）注（四）に同じ

（六）三浦清宏「小島信夫の文体・覚え書 「アメリカン・スクー
ル」から「返照」を経て」『水声通信』平17・12

（七）本多秋五「文芸時評（上）」『中日新聞』昭40・6・25夕）に
は『私はこの作者の仕事をとびとびにしか知らないが、こんどの
作品はここ数年來のこの人の仕事の集大成といつてよからう』、
山本健吉「文芸時評（上）」『読売新聞』昭40・6・29夕）でも
『おそらく、小島氏がこの数年あたためていた題材だと思うが、
これはそれだけの重みと醗酵度とを持った佳作である』と評され、
『抱擁家族』を集大成とみなす理解は広がっていた。

※引用に付した傍線、「略」による省略は、すべて引用者による。

（まつもと かつや・信州大学人文学部准教授）